

「古事記」をよみがえらせた 本居宣長

●読めなくなっていた『古事記』

江戸時代の国学者、^{もとおりのりなが}本居宣長が、その生涯をかけて研究したのは『古事記』でした。『古事記』は奈良時代初頭の712年、^{おのやすまる}太安万侶が^{へんさん}編纂したとされる現存する日本最古の史書です。720年に完成した^{ちやくせんこくし}勅撰国史の『^{にほん}日本書紀』と同様、^{しよき}神話から古代天皇の事跡を記していますが、この2書の書きぶりには大きな違いがありました。

片仮名や平仮名もなかった時代、『日本書紀』は古い記録や言い伝えを、漢文に「翻訳」して書かれています。漢文の^{そよう}素養があれば、誰でも読みとくことができました。これに対し『古事記』は、日本の古語を漢字の読みで表した^{まんようがな}万葉仮名を交えた和漢混淆文で書かれています。しかしこの古語は江戸時代になるとほとんど使われておらず、どんな意味なのか、わかる人は少なくなっていました。ですから当時、『古事記』は一部の人を除いて読めなくなっていたのです。

●万葉集の大切さを教えた賀茂真淵

宣長は「古い日本語で書かれた古事記を読まなければ、古代の日本人の心（古道）はわからない」と考え、古事記研究を始めたのです。そこには国学の先輩だった賀茂真淵との出会いがありました。

伊勢国（現三重県）松阪で医師をしながら国学の研究をしていた宣長は33歳のころ、この地を訪れた真淵を宿舎に訪ね一夜、教えをこいました。古事記を研究したいという宣長に真淵は「私も古事記を研究したかった

が、それにはまず万葉集を学ばなければならないと思った」と答え、やはり古語で詠まれた万葉集の研究の大切さを教え、宣長を励ました。この逸話は「松阪の一夜」として語り継がれました。

●35年かけて『古事記伝』

以来、宣長は万葉集の古語などに学びつつ35年の歳月をかけて『古事記伝』全44巻を完成させました。その後多くの学者が^{ちゆうしやく}注釈を加えましたが、基本的には宣長の読み方が基本になっています。「松阪の一夜」がなければ、日本人は日本の神話や歴史がつめこまれた『古事記』を読むことはできなかったのです。

宣長は『古事記』のほかにも『源氏物語』などの研究にもあたりました。また上田秋成ら学者らとも論争しながら、古代の日本人の生き方、すなわち古道をあきらかにし、江戸時代中期以降の国学隆盛の基礎を築きました。



本居宣長 (1730～1801)
(三重県・本居宣長記念館蔵)